

書評 Wynne Maggi, Our Women Are Free: Gender and Ethnicity in the Hindukush

著者	小島 令子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	43
号	8
ページ	66-70
発行年	2002-08
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007876

Wynne Maggi,

*Our Women Are Free :
Gender and Ethnicity in
the Hindukush.*

Ann Arbor: University of Michigan
Press, 2001, xxi+266pp.

こじま れいこ
小島 令子

I 著者の視点

本書は、パキスタンの北西辺境州チトラル県に住む少数民族「カラーシャ族」(Kalasha) についての、女性の視点から語られた民族誌である。

カラーシャは独自の多神教を信仰するため、周囲のイスラーム教徒から「異教徒」(カーフィル) と呼ばれている。以前はチトラル県全域に居住し、さらに国境を接するアフガニスタン側にも似たような文化を持つ20万人ほどの民族集団が住んでいたが、次第にイスラーム教への改宗が進んで、現在はヒンドークシュ山脈東部の3つの谷(ルクムー、ムムレット、ビリウ)に住むこのカラーシャだけが、唯一「異教徒」として残っている。人口は約3000人と推測される。紀元前327年のアレキサンダー遠征軍の子孫であるという伝承がある一方で、神々の名前や役割などではサンスクリット文化との関連も指摘されるなど、その出自については多くの議論がある。また、宝貝を700近く縫い込んだ被り物や黒い貫頭衣など、民族衣装も周辺のイスラーム社会とはかけ離れた独特のものを持つ。

イスラームに包囲され、民族としての存亡の危機に常にさらされているカラーシャ社会では、聖=浄(onjashta)/俗=不浄(pragata)という世界観が強く意識され、“穢れた”イスラーム世界との境界を明確に設定するために、“聖なる”祭りや儀礼が

頻繁に行われる。また女性も“穢れて”いると考えられ、月経や出産時にこもり小屋(bashali)に隔離されるなど、ジェンダーによる社会的役割分担がはっきりしていて、男性優位の社会を形成する。

このように特異な文化や伝統を保持してきたことから、宗教や世界観を扱う社会人類学的研究を中心に、カラーシャは多くの研究者たちの関心を集めてきた。しかし神話や伝承に精通し、儀礼を司るのが男性であるため、男性だけをインフォーマントとして、男性側からの論考になりがちであった。

本書が従来の研究と大きく異なる点は、ここにある。女性である著者は、“穢れた”存在とされる女性を観察の中心に据え、カラーシャの「エスニシティ」(単なる「民族性」だけでなく、イスラームによって多様な局面で意識させられる民族としての一体感も含めて用いられる)は、男性が担当する宗教儀礼だけでなく、女性の「行為能力」(agency: 具体的な行為を可能にし、しかも多元的に行いうる潜在能力)に依存するところが大きいと考える。論考の全編をとおしてこの行為能力というキーワードが用いられ、女性の日常のおしゃべりと行動を分析することで、社会構造全体が見直される。社会学から発生した概念である行為能力を文化人類学で展開させたバース(F.Barth)に師事した著者の経歴を見れば当然とも言えるが、単なる分析にとどまらずに生き生きとした民族誌としてまとめたところが、本書の際だった特徴となっている。

フィールドワークは1992年に予備調査を実施したのち、2年にわたって3つの谷の中で最も北側に位置するルクムー谷のチェットグルー村で断続的に行われたようだ。なお、評者はルクムー谷を訪れたことはないが、1982年以降、文化的にやや異なる面を持つ他の2つの谷で民族音楽学のフィールドワークを実施してきた。この体験をふまえながら、著者と同じ女性という立場で本書の構成を追い、紹介していきたい。

II 本書の内容

序章 「女性たちの行進」

『アジア経済』XLIII-8 (2002.8)

まず冒頭で、カラーシャと近隣のイスラーム教徒との間で起こったある事件をきっかけに、女性たちがとった行動が描かれる。男たちが争いに巻き込まれている間に、80人以上の女たちが谷を出て、県知事がいるチトラルの町へと直談判しに出かけたのだ。しかし結果的に、道のりの途中で駆けつけたカラーシャの有力者（男性）や町から派遣された行政官に強く説得され、いつのまにかみんなの気持ちは散り散りになって、結局、目的は達せられない。

意気揚々と出発したのに肩すかしに終わってしまったが、女性たちにとってはこれは大きな意味のある行為であった。自発的に、女だけで、正装して、歩いて、谷を出て、直訴しに出かけたのだ。著者はこの事件に、カラーシャの女性の「自由」を象徴する典型的な要素がいくつも込められていると述べ、続く本論でも度々このエピソードに立ち返る。

第1章 「道のり」

カラーシャは「我々の女たちは自由だ」(homa istrija azat asan) という表現をよく使う。ではカラーシャが言う「女性の自由」とは何か、と著者は問う。そこでまず最初に本書の核心とも言える、ある女性の言葉を紹介しておこう。この言い回しがいかにもカラーシャらしくて、興味深い。

「私たち、カラーシャは自由なんだ。行きたいところに行く。もちろん、夫に聞くかもしれないよ。だけど聞く必要なんてない。だめと言われたって行くし、やっぱり行かないかもしれない。だから、夫の許しなんかなくなっちゃって、カラーシャの女は行きたいところに行けるんだ。イスラーム教徒は悪い連中だよ。女たちを家のなかに閉じ込めてしまうんだから。カラーシャはそんなことはしない。カラーシャの宗教は、自由な宗教さ。…カラーシャの女は、夫が気に入らなければ、いつだって駆け落ちしていいんだ。糞食らえの改宗者どもは、みんな後悔して私たちをうらやましがっているよ。」

カラーシャの社会では男＝聖／女＝俗と考えられ、本質的にジェンダーが平等でない、男性優位社会である。重要な宗教儀礼はすべて男がとり行い、土地も家畜も家も男性が所有して、女は男に従属する

ことを強いられる。そういう社会での女性の自由(azat)とは、英語の“freedom”から連想される、束縛がないことや自立を意味するのではない。それは、「選択の自由」、「拘束の上に成り立つ自由」、「女が男の習慣に抵抗する自由」なのである。そして、カラーシャの男たちも、イスラーム教徒と自分たちの大きな違いは「女性の自由」にあると自負し、女性にこのような行為能力としての自由があることを認めている。カラーシャらしき、つまり非イスラーム的なエスニシティは、この女性の行為能力によってさらに際だつたため、たとえ男の意に反することを彼女たちがしたとしても、自由を認めざるをえない。

チトラルへの行進は、この自由の産物であった。女性たちは自発的に行動に出たことをイスラーム教徒（入植者や改宗者）に誇示して、自分たちのエスニシティを見せつけた。一方で、彼女たちの行為能力の限界も明らかになる。女性は基本的に1人で行動し、結束力は希薄であるため、一度社会的な圧力を加えられると、その後の判断は個人が決めることになる。したがって行進は解体してしまい、目的を遂げることができなかったわけである。

第2章 「見えないランドスケープ」

続く第2章では、カラーシャの世界観の基層をなす聖／俗の観念に基づき、「穢れた」とされている女性がいかに土地の聖性をコントロールして、谷の社会的なランドスケープ（著者は「文化的土地景観」という意味で“landscape”を使う）を動的に変化させているのかを明らかにしている。

カラーシャは、男に関係するすべてのものや場所は山などの高地にあり、逆に女がもたらす“穢れ”は低地にあると考える。聖なるものは祭壇、放牧場、家畜小屋、雄ヤギの肉、泉など。穢れたものは死、こもり小屋、月経血、出産血、近親婚、イスラーム教徒など。谷の各所や家の中にも、女性が踏み込んではいならないとされる場所がいくつもある。「そこは聖なる道だから歩いてはいけない」、「これは聖なる肉だから食べてはいけない」などと忠告されるたびに、評者も自分の“穢れ”をとがめられているような気がどうしてもしてしまう経験を持った。

しかし、著者は次のように述べる。外から見ると、女性の“穢れ”は男性によって強制されるものととらえられがちだが、カラーシャの女性はそれを自分たちに課された侮辱と感じてはいない。むしろ“穢れ”とは、女性の「行為能力によって形成される概念」である。谷を動き回るときにどこを「歩くか」、「歩かないか」は、実質的には女性自身が選択できる。したがって聖／俗の境界は流動的で女性の行動によって変化し、女性はそれを変化させることができるのを誇りに思っているのだという。その典型的な例として、月経の“穢れ”によっていかに聖／俗の境界が変化するかが検証される。

女性は、月経中は最も“穢れて”いるので、その期間は村の下方にあるこもり小屋に行かなければならない。しかし近頃はさまざまな理由でこのしきたりに従わず、家に留まったり、畑で仕事に従事したりする女性が急に増えてきたのだそうだ。“穢れた”女性が村に留まれば、当然、聖／俗の境界は女性自身の行動範囲とともに動いていく。男たちは伝統に基づく儀礼行為によってしか聖性を作り出すことができないが、女性は自分自身の行為能力で聖性をコントロールできる。したがって男は聖性の保持を、現実的には女に頼らざるを得ないと結論付ける。

第3章 「女性の仕事」

続く第3章では前章とは逆に、ランドスケープにおける女性の動線に注目して、男女の役割分担が考察される。カラーシャの仕事は分業制で、男は牧畜、女は農耕を担当する。女性は飛び地となっている山間の畑から畑へと移動し、人手が足りなければ実家の畑仕事も手伝い、自分が耕した畑には深い愛着を持つ。このようにイスラーム女性と違って自由に動き回れることは、カラーシャ女性のアイデンティティの確立に欠かせない。畑作への貢献度や家事能力、一家の家計への責任など、女性の行為能力に係る事例が具体的に挙げられ、分析される。

第4章 「ファッション」

カラーシャ女性がエスニシティを強く意識する機会として、彼女たちの「ファッション」(“costume”)にはハレの衣装という意味合いがあるので、著者は文化的意味も込めて“fashion”を使う)が

ある。5本に三つ編みされたお下げ髪。色とりどりの模様で飾られた黒い貫頭衣、宝貝をびっしり縫いつけた独特のヘアバンドと被り物、何百重もあるビーズの首飾り。男の姿しか見えないイスラーム社会からカラーシャの谷に到着すると、この女性たちの民族衣装にまず目を奪われる。この章ではファッションをとおして明らかになる女性の行為能力が検討される。

まず服作りに費やす膨大なエネルギーとお金。これはイスラーム女性とちがって自分たちが「見られる」ことを意識するためである。次に、毎年のように派手になる流行。外の世界から次々と新しい色の糸やビーズ、図柄、小物などを取り入れる積極性と柔軟性を持ち、「その年の流行」を作り出していく。最後にファッションが表出する人間関係。夫から、恋人からビーズをもらう。ビーズをたくさん持つことや美しい服を持つことは女としての価値の高さであり、富であり、誇りなのだ。手先の器用な者は遠く離れた友人や他の谷に住む親戚にまで自慢の服を贈り、物質だけでなく技術や労働力を交換することで、社会的なつながりを強化する。

ファッションは、カラーシャとしてのアイデンティティを表現する最大的手段である。しかし冒頭のチトラルへの行進のシーンで見たように、カラーシャの谷からひとたび外のパキスタンという大きな社会に出ると、この個性的な民族衣装のせいでたちまち“未開”や“エキゾチック”などという偏見をもたれ、被差別民族であるカラーシャというレッテルを貼られて無力化させられてしまうことになる。

第5章 「カラーシャのバシャーリ」

「バシャーリ」とは、こもり小屋である。これまでバシャーリ内の女性の生活については、ほとんど明らかにされていなかったが、著者は周囲が自分を受け入れてくれるようになったところから、バシャーリに行き始めたという。

女性たちはバシャーリに行くのを楽しみにしている。なぜなら、日常の仕事から解放され、ゆっくり休むことができるからだ。またカラーシャの日常生活にはプライバシーがないが、ここでは世間の目を逃れることもできる。このプライバシーと自由な時

間によって、女性は普段とちがった行動をとる。1日中ごろごろしていてもいい。歌ったり踊ったりもする。セックスの話をしてもいい。駆け落ちをする相談もできる。村や氏族の区別なく、ひとつの家族として生活する。月経中でなくても、妊娠を隠すため、あるいは単なる息抜きのために来る女性さえもいるという。バシャーリでの女性の生活や出産の様子、女性だけで行う宗教儀礼などが著者の体験をとおして記述され、資料としての価値が高い。

一般的には、こもり小屋は男性が女性に課する抑圧的な制度ととらえられ、女性を拘束する象徴と考えられがちだ。これまでのカラーシャの研究でもそうだった。しかしバシャーリは、カラーシャの女性の文化や共同体としての暮らしの中心でもある。バシャーリでは村社会の圧力から離れて、自分自身で物事を決断できる。自由な人間になれる場所なのだ。

第6章 「結婚」

ここでは著者の「身内」である2人の女性の半生が、ライフヒストリーとして記述される。女性の能動的な生き方や独特の婚姻の現状がカラーシャ自身の口からみずみずしく語られていて、本書のなかで最も興味深い章となっている。

結婚は多くの場合、女性が6歳から12歳ぐらいのうちに親が「与える」相手を決めてしまう許嫁婚である。しかし、それは女性を拘束するものではない。妻は夫が気に入らなければ、駆け落ちする自由が認められている。また、男性は2人以上の妻を持つこともできるが、その場合、第一夫人は夫のもとに留まるか否かを選択できる。つまり女性は最初は与えられるが、それ以後の自分の人生は、自分の選択で変える自由があるのだ。

ここで重要なのが、婚資制度である。親同士の間で結婚話が成立すると、鍋、壺、釜、銃、家畜などの婚資が妻の家に支払われる。婚資制度には、(1)夫が離婚を希望した場合、婚資は戻らない。(2)妻が駆け落ちした場合、新夫は前夫の払った婚資の2倍の婚資を前夫に払う。(3)再び妻が駆け落ちしたら、元の婚資の3倍(場合によっては4倍)を前夫に払う、という決まりがある。この婚資制度によって女性は守られているとともに、自由を拘束されると著者は

論じる。まず、婚資は膨大な額で夫が所属する氏族全体からの援助を得て支払われるため、夫は婚資を放棄までして妻を捨てることはない。したがって、婚資は妻を守る。また婚資が払われたからといっても、妻には駆け落ちする自由があるので、婚資は女性を束縛するものとはなりえない。とはいえ、駆け落ちした場合、新夫は少なくとも倍以上の婚資を払わなければならないので、裕福な男としか駆け落ちできないことになり、逆に、婚資によって女性は束縛されるとみなすこともできる。

女性に駆け落ちの自由があることはこれまでも論じられてきたが、著者はさらに女性の「負の行為能力」(negative agency)に注目する。つまり「駆け落ちしない自由」、あるいは夫が第二夫人を娶っても「留まる自由」である。女性にとっては、行動しないということも「行動」であり、単に権威を受動的に受け入れているのではない。行動しないで留まることを選択してさらに意味のある人生を見出そうとするのも、女性の行為能力のひとつなのである。

終章 「太陽を呼び戻す」

最後は、毎年行われる春の行事で締めくくられる。4月になっても天気の良い日が続くと、女性たちはカラーシャの故郷と考えられている、はるか西方にある神話上の故地「ツィム」をめざし、歌を歌いながら太陽を迎えに行く。男たちは「道のりが危険だから」と歌いながら呼び戻そうとするが、女たちは耳を貸さない。結局谷を出たところで男たちが追いつき、そこで一緒に小さな儀礼を行って戻ってくる。著者は、この行事は冒頭で描かれたチトラルへの行進と同じ構造を持ち、「我々の女たちは自由だ」を象徴しているという。つまり、「行く」という行為自体がカラーシャのエスニシティの発露であり、女性が自由であることの結果なのだ。

しかし、と著者は強調する。これまでさまざまな事例をもとに女性の自由について述べてきたが、この自由は決して男たちを退けて成り立つわけではないと。女性たちは、カラーシャ社会の根幹にある父系の権威に常に深い尊敬を抱いている。女たちの自由と父系制度はどちらも社会的規範として共存し、さらにお互いの存在を常に前提としている。上記の

太陽を呼び戻す行事でも、最初は男女が対立を装いながら、最後には両者の協力で行事が完結した。こうして対立する2つの規範が衝突し、結果が予測できないジレンマとして顕在化することで、社会全体に柔軟性とダイナミズムが発生する。カラーシャ社会の根底に位置するこの両義性こそ、数世紀にわたる民族存亡の危機をカラーシャが乗り越えてくることができた源泉になっていると著者は見なす。

カラーシャの女性は、何もないところから人生を始めようとは考えていない。自分が直面した状況の中で、常に最善の選択をしようとする。つまり女性の自由とは、新しい可能性を創出するのではなく、オプションから選び出すことに他ならない。しかし、それがあらゆる抑圧や逆境を変え、大きな社会的変化を生み出すことにつながっていくのであると著者は結ぶ。

III 本書の特徴

著者は「行為能力の概念は発展したにもかかわらず、その論文は無味乾燥」と従来の研究を批判しているが、本書を読み終えて最も印象深かったのは、著者のカラーシャに対する愛情のあふれた、生き生きとした語り口である。女性たちがよく口にする言葉やカラーシャ語特有の言い回しがうまく英語に置き換えられて散りばめられ、会話がそのまま聞こえてくるようだ。女性の平凡で日常的な暮らしの分析が本書の核心部分であることを意識してのことだろうが、全体をとおして平易な文体で書かれ、論文であることを感じさせないのも魅力のひとつだろう。

本書の特徴としてもうひとつ挙げておきたいのは、従来のカラーシャの研究のように伝統文化や伝承といった過去の遺産をもとにして「本来あるべきカラーシャの社会構造」のモデルを描いているのではない、という点である。逆に、女性たちが能動的に受け入れる新しい文化と切り捨てた伝統文化、つまり「選択したもの」と「選択しなかったもの」に焦点をあて、これまで見えなかった社会構造の本質と文化変容の実態を引き出している。

カラーシャ社会の最も大きな変化として注目した

いのは、女性がバシャーリに行かないで家に留まり、通常の日常生活を送るようになったと著者が指摘する点である。これは評者にとっては驚きだったが、フィールドワークが行われた1990年代前半は、外部からの援助が流入してカラーシャの共同体が最も変化した時代だった。また著者が居住したチェットグルー村は、谷の中でも特殊な位置付けにあること——比較的新しい開墾地、谷の入口にあってイスラム教徒が多い、他の谷から嫁として来た女性が多いこと——を考慮すると、古い伝統を放棄して合理的な生活を取り入れるという、村全体の風潮があったのかもしれない。著者も述べているが、その後改宗者が相次ぎ、天災が続いたため、これは村が“穢れた”からだとして長老たちが考え、強制的に女性たちをバシャーリに行かせるようになったという。いずれにせよ、このような伝統の小さなほころびから社会全体の構造や変容を見つめ直す方法論は新鮮であり、またそれができる時代、土地柄であったことも指摘しておきたい。

伝統文化がすたれつつある現在だからこそ本質が見えてくるというのは、皮肉な結果ではあるが、それは決してカラーシャが民族として衰退していることを意味するのではない。著者も述べるように、カラーシャは“ダイナミックな民族”である。女性だけでなく、民族全体の行為能力を通じて、エスニティを保ちながらも近代化への過程をどう乗り越えていくか。それがカラーシャ自身が直面している最大の課題であり、今後の大きな研究テーマにもなりうるだろう。

文献リスト

- Loude, Jean-Yves et Viviane Lievre 1984. *Solstice Païen*. Paris: Presses de la Renaissance.
- Parks, Peter 1990. "Livestock Symbolism and Pastoral Ideology among the Kafirs of the Hindu Kush." *Man* 22 : 637-660.

(北部パキスタン民俗研究家)